

人間科学における主観的言説の重要性

杉万俊夫（京都大学）¹

要 約

人間が知ろうと知るまいと存在する事実を探求する自然科学においては、研究対象を一線の向こう側に据え、研究者は一線のこちら側から研究するのに対して、もう一つの科学、すなわち、人間科学においては、当事者（研究対象）と研究者が協同的实践を展開し、そこから知識を紡ぎ出す。本稿では、科学を、言説空間を豊かにする営みと捉えた上で、自然科学と人間科学の言説空間の違いを、廣松（1979, 1982）の言語論・判断論を援用して明らかにした。すなわち、言説空間の構成を、「人称的（指示・述定・表出・喚起）---- 没人称的（指示・述定）」の軸と「知覚現場的言説 --- 概念思考的言説」の軸によって整理し、自然科学の言説空間は、没人称的な知覚現場的・概念思考的言説によって構成されるのに対し、人間科学の言説空間は、準没人称的あるいは人称的な知覚現場的・概念思考的言説によって構成されることを論じた。これによって、両科学が共同研究を行う場合の人間科学の守備範囲を明確にするとともに、とりわけ、人称的な知覚現場的言説、すなわち、主観的言説が人間科学の言説空間で重要な地位を占めることを指摘した。

キーワード：主観的言説、人間科学、自然科学、人称的・没人称的言説、知覚現場的・概念思考的言説

1. フーコー的権力と科学

現代の権力において、権力を振るう者と権力にひれ伏す者の単純な区別は存在しない。社会の一人一人が、皆、権力を振るうと同時に権力にひれ伏してもいる。へたに権力者を指さしても、その指先は遠大なループを描いて、自らの背中を指さすことになる。まさに、社会が社会に対して権力を行使しており、皆、その権力作用の中に織り込まれている。このような「社会が社会に対して」という再帰性を特徴とする社会スケールの権力作用は、フーコー的権力と呼ばれている。

現代社会の問題解決は、もはや悪の権化たる権力者の打倒によっては完遂されない。当面、打倒の対象となる人物や組織があろうとも、その打倒は最終的な問題解決を意味しない。なぜならば、他ならぬ自分自身も、打倒の対象の片棒を担いでいるからだ。また、悪の権化などと述べたが、そもそもフーコー的権力に織り込まれている身にとって、悪の覚識（問題の覚識）は容易ではない。

歴史的に、フーコー的権力は、個の確立と相即的に進行した。個の確立とは、皮膚で画

¹ 京都大学大学院人間・環境学研究科 sugiman@toshio.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

された肉体の内部にあるとされる心（あるいは頭）でなされる思考や判断を格段に重視する人間観、すなわち、個人主義の確立である。個人主義において、心は、思考や判断がなされる格別に重要な座とされ、それは人間の本質とも言える部分とされる。しかし、われわれにとって個人主義がいかにか自然な人間像に見えようとも、それが近代という時代の産物であることは銘記しておかねばならない。実際、日本社会を顧みるに、江戸期（わずか100年ちょっと前）までは、そのような個人の観念はほとんど存在しなかった。明治に入り、欧米の書物に出てくる *individual* を訳そうにも適当な日本語がなく、「個人」という造語があてがわれた。同様の事情で、多数の *individual* が契約関係のもとに形成する *society* には、「社会」という造語があてがわれた（柳父 1982）。

したがって、現代に生きるわれわれがフーコー的権力に織り込まれると言っても、人々が集団催眠にかかるがごとくに巻き込まれているのではない。人々は、まさに、個人として、自らの心で（あるいは、自分の頭で）思考し判断しつつ、フーコー的権力に織り込まれている。いや、むしろ、思考・判断するからこそ、フーコー的権力が強化されるというべきだろう。自らにとって良かれと思う行為、また程度の差こそあれ、周囲の人たちや世の中にとって良かれと思う進路を思考し判断することを通じて、われわれはフーコー的権力に織り込まれるのである。

しかし、フーコー的権力に織り込まれている人々が、皆、一様に、権力を行使しつつ権力にひれ伏しているわけではない。そこには、フーコー的権力に織り込まれつつも、その汚濁をより多く浴びている少数の人たちもいる。あるいは、フーコー的権力で動く社会の多数派から疎外されている少数の人たちもいる。その少数派のクレーム（問題提起）こそ、フーコー的権力を可視化し、それを変化させる契機となる。それは、少数派の状況改善・改革のみならず、多数派がフーコー的権力を相対化し、脱構築する契機ともなる。

科学、あるいは学問の世界もフーコー的権力と無縁ではない。いや、科学や学問こそ、判断・思考の座たる頭の世界の産物であるがゆえに、強力なフーコー的権力に巻き込まれているとさえ言える。本稿では、科学や学問の世界を席卷するフーコー的権力を可視化し、その中で従来息苦しさを覚えつつ生きざるをえなかった少数派に正当な位置づけを与えてみたい。その少数派とは、他ならぬ社会学、社会行動学のことである。

過去、あるいは現在の「事実」を見つめようとする学問を志す人間にとって、「そんな研究は科学ではない」という言葉は、「お前は人間ではない」と言われているかのごとき屈辱感を与える。そこに言う「科学ではない」とは、「研究成果に客観性がない、普遍性がない」との意である。客観性と普遍性を追求してきたのは自然科学であるから、「科学ではない」という批判は、正確には「自然科学ではない」あるいは「自然科学に基づいた工学的研究ではない」という批判と同義である。社会学・社会行動学も、過去幾度となく、そのような批判を浴びてきた。また、そのような批判を浴びぬよう、自らの方法論を考究してもきた。

社会学・社会行動学をはじめ自然科学以外の学問領域は、ときに自然科学と同じ「科学」の2文字をつけて、人文科学、社会科学などと呼ばれる。しかし、同じ科学の2文字を有する科学の世界において、人文科学・社会科学は圧倒的に少数派である。たとえば、筆者が所属する京都大学を例にとって自然科学・工学と人文・社会科学を比較すれば、学生数、教員数、予算のいずれで見ても、人文・社会科学は全体の2割弱を占めるに過ぎない。

科学の世界の少数派たる人文・社会科学、とりわけ社会学・社会行動学は、多数派のフーコー的権力を可視化する可能性を秘めている。本稿は、この可能性を実現しようとする一つの試みであり、少数派のクレームたらんことを意図している。具体的には、自然科学を含む科学一般を言説空間の概念のもとに定義し直した上で、自然科学とは異なる言説空間を守護範囲とする、もう一つの科学として人間科学の必要性を主張する。しかる後に、人間科学が、その守護範囲を全うするためには、主観的言説の重要性を十分認識しておかねばならないことを論じる。

2. 自然科学と人間科学

本節では、言説空間に基づく本格的議論に入る前段として、あらためて自然科学の鉄則を確認した上で、その鉄則が通用しない現象を対象とする、もう一つの科学が必要であることを論じる。そのもう一つの科学こそ、人間科学に他ならない²。

自然科学は、人間が知ろうと知るまいと存在する事実の解明を目的とする。たとえば、ワトソンとクリックが 1953 年に発見した DNA の 2 重らせん構造も、それが発見される前から存在していた事実、人間が知らなくても存在していた事実である。また、当然のことではあるが、後述する人間科学との決定的な差異として確認しておくべきことは、2 重らせん構造が発見され、それが人間の知るところとなっても、2 重らせん構造の事実にまったく影響はないことである。

人間が知ろうと知るまいと存在している事実を探求するという自然科学の目的は、次のような方法論的鉄則として具現化される。すなわち、研究対象（観察対象）と研究者（観察者）の間には一線が引かれ、一線の向こう側に据えた研究対象（観察対象）を、研究者（観察者）は一線のこちら側から研究（観察）するという鉄則である。理想的には、遠距離にいる昆虫の生態を超望遠カメラで観察するように、研究者が一線を越えて研究対象に接触することはない方がよい。その昆虫は、よもやカメラで撮影されているなど知る由もなく、いつもどおりのあるがままの姿を見せてくれる。しかし、対象とする現象によっては、物理変化や化学変化などを引き起こすために、研究者が一線を越えて一定の操作を施さねばならない場合もある。また、測定上の必要から、測定器具や測定装置を装着することが必要になる場合もある。しかし、それらの場合といえども、操作や測定によって、本来観察したい対象の性質が変化してしまうことは絶対に避けねばならない。一線を越えての操作や測定が必要な場合にも、それは必要最低限にとどめられるべきであり、まちがっても対象の観察したい性質が影響を受けることなどあってはならない。

しかし、この自然科学の鉄則が通用しない現象もある。実際、社会学・社会行動学をはじめ人文・社会科学が対象とする現象のほとんどには、自然科学の鉄則が通用しない。この点において、社会科学の女王と呼ばれ、数学の適用でも自然科学に近いとされている経済学ですら例外ではない。次に景気予測を例に、これを説明してみよう。

たとえば、高名な経済学者が、経済学の理論と収集されたデータに基づき、日本の景気

² 第 2 節は、すでに杉万（2000: 第 1 章, 2006: 第 1 章）、Sugiman(2006)に発表した内容を、手短かにまとめたものである。

は先行き1年、相当程度悪化するだろうという予測を行ったとしよう。この場合、自然科学流の図式に則れば、一線のこちらにいる研究者は経済学者、一線の向こう側の対象は日本の経済にかかわる人々（生産者や消費者）の行動である。この経済予測は、またたく間にマスコミで報道され、多くの人の知るところとなる。生産者は、景気の冷え込みで消費者の購買意欲が低下することを見込み、生産を手控える。また、消費者は、景気悪化に伴う収入減を見越し、消費を手控える。すると、生産者は一層生産を手控えざるをえなくなる。こうして、景気悪化のサイクルが始まり、経済学者の予測どおり、本当に景気は悪化する。

しかし、どうだろう。はたして経済学者の予測が当たったと言えるのだろうか。そうではない。経済学者の予測を生産者や消費者が知ることによって、自らの行動を変更し、その結果、予測の方向に動いていっただけの話である。このように、予測を知ることによって予測の方向に事態が推移し、結果的に予測が当たってしまう現象は、社会学者マートンによって「予言の自己成就」と呼ばれている。

しかし、予言が自己成就せず、外れてしまうというシナリオもありうる。たとえば、上と同じ予測を知った生産者が、このままの価格では消費者に買ってもらえなくなることを恐れ、コスト削減によって低価格の製品づくりに努めたとしよう。また、このようなコスト削減、低価格化の動きが広範な生産者に浸透したとしよう。そうすると、市場には、これまでよりも安い製品が並び、今までの価格では買うのを躊躇していた消費者の購買意欲をそそるかもしれない。そうなれば、消費は伸び、生産も抑える必要がなくなり、結果的に、予想とは逆に景気は悪化しないですむ。しかし、この場合も、予測が外れたからと言って、経済学者の理論が間違っていたとかデータが不正確であったというわけではない。前の予測が当たった場合と同様、予測を知ることによって、予測の対象であるところの生産者や消費者の行動が変化してしまい、その変化の方向が、今後は予測とは逆方向であったというにすぎない。

以上の景気予測の例は、予測対象が研究者の予測を知ることによって変化してしまうことを示している。このような事態は、自然科学では、かりに人間を対象とする場合でも起こらない。たとえば、自らがガンに冒されていることが医師の診断によって判明し、その事実を知ったからといって、ガンがよくなることも悪くなることもない。

景気予測の例を一般化すれば、研究者が研究対象を一線の向こう側に据えて、研究対象を外在的に研究することが不可能である、そのような現象が存在するということである。人文・社会科学と呼ばれる領域が対象とする現象は、ほとんどこのような現象と言ってよい。

研究対象を研究者が外在的に研究できないということは、研究の営み自体が、研究対象と研究者の共同的営為としてしか存立しないことを意味している。平ていに言えば、研究対象と研究者は、同じ土俵の上で、一緒に何かをやっているという構図になっているのだ。同じ土俵で一緒に何かをやっている仲間を研究対象と呼ぶのは、いかにも失礼である。そこで、研究対象に代えて、当事者という言葉を使うことにしよう。先の経済予測の例に立ち戻れば、そもそも、なぜ経済学者が予測を行うのかといえば、当事者（生産者や消費者）が予測をしてほしいというニーズを持っているからである。生産者にとっても消費者にとっても、今後景気がどのように推移するかは、自らの行動を決定する上で重要である。そ

のニーズに応えるべく、経済学者は予測を行い、それを発表する。そうすれば、その予測を見て、当事者が自らの行動を変化させるのは当然である。生産者や消費者は、経済学者とともに同じ土俵の上で「経済ゲーム」を遂行しているのだ。

当事者と研究者が「一緒に何かをやっている」ことを、両者による協同的实践と呼ぶならば、当事者と研究者の協同的实践の中から知識を紡ぎだしていく、もう一つの科学が必要である。そのような科学を人間科学と呼ぶことにしよう。社会学や社会行動学をはじめ人文・社会科学の大半は人間科学とみなすことができる。ここで、くれぐれも注意すべきは、人間科学とは、単に人間や人間社会を対象にする科学という意味ではないということである。たとえば、人間の肉体的疾患を対象とする医学は、いかに人間を対象としていても自然科学である。

以上、本節では、研究者と研究対象の関係を異にする 2 つの科学 ---- 自然科学と人間科学 ---- を区別した。両者の違いを要約すれば、自然科学は、人間がそれを知ろうが知るまいが存在している事実を解明しようとする。その目的は、研究者と研究対象を一線で分離し、一線の向こう側に据えた研究対象を、研究者は一線のこちら側から外在的に研究すべしという方法的鉄則として具現化される。一方、人間科学は、当事者と研究者が共同的实际を展開し、その中から知識を紡ぎだすことを目的とする。

3. 科学における言説空間の構成

(1) 科学と言説空間

本節は、本稿の中核をなす節として、前節において、研究者と研究対象の關係に即して素描した自然科学と人間科学の違いを、言説空間の視点から論じる。それと同時に、科学全般の言説空間の中で、人間科学が守備範囲とする部分空間を明確にし、さらに、その守備範囲を全うするために留意すべきことを論じる。これをもって、自然科学（あるいは、自然科学に基づく工学）と人間科学の共同研究において、人間科学が果たすべき役割を見定めたい。

従来は、「科学＝自然科学」であったのに対して、本稿では、人間科学という、もう一つの科学の必要性を主張した。しかし、もう一つの科学を主張するには、まずもって、そもそも科学とは何かという問に答えること、すなわち、自然科学と人間科学がともに科学である限りにおいて双方が満たすべき必要条件を明らかにすることから始めねばなるまい。

本稿では、科学を、明示的な言説 (discourse) によって言説空間を豊かにする営みと定義したい。以下、この定義に関して、次の 3 点を強調しておこう。まず第 1 に、科学における言説には、日常言語、数学言語、記号言語による言説が含まれる。物理学では数学言語が主要な地位を占める、文化人類学ではエスノグラフィのような日常言語が主要な地位を占めるなど、科学の個別領域によっていかなる種類の言説が多用されるかは異なるが、科学が言説なしには存立しえないこと、さらには、科学は言説に対する異様なまでの執着があってこそ存立することは銘記しておくべきである。

しかし、言説に対する執着という点においては、文学という芸術的営みもあるではないか、という疑問が生じよう。この疑問に答えるには、上記の定義で強調したい第 2 の点、すなわち、科学の言説は「明示的」な言説であるという点に注意する必要がある。確かに、

文学は、その名にたがわず、言説こそが存立基盤である。しかし、文学における言説では、言説では明示されない部分、すなわち、行間の含蓄が重要である。何もかもをすべて書きつくしたのでは、文学という芸術にはなりえない。それは、長編の小説でも当てはまるし、詩歌の類では一層当てはまる。

文学とは対照的に、科学の特徴は、暗示的な含蓄に頼ることなく、明示的な言説にこだわる点にある。もちろん、実際に論文や書物を書く上では、紙幅の制限があり、すべてを書きつくすことは不可能である。しかし、そこには、もし要求されるならば書くことができるという前提がなければならない。また、書いたからと言って、論文や書物がわかりやすくなったり、反対に冗長になることはあっても、それによって論文内容の真偽や価値が左右されることはない。

科学の定義に関して強調しておきたい 3 点目は、「言説空間を豊かにする」という場合の豊かな言説空間とはいかなるものか、という点である。自然科学においては、新しい事実の発見が新しい言説を生むことによって言説空間が豊かになる。しかし、人間科学においては、必ずしも新しい「事実」の発見だけが言説空間を豊かにするとは限らない。今まで支配的であった一群の言説に対して、それとは矛盾する新しい言説群が登場した場合、選択の幅を広げるという意味で言説空間は豊かになる。結果的に同じ言説群が選択されたとしても、そもそもその言説しか存在しなかったのか、あるいは、その言説が選択の結果採択されたのかによって、その言説群がもつ意味は大きく異なるだろう。

(2) 言説空間の 2 つの軸

では、科学における言説空間の構成をいかに把握すればよいのか。具体的には、科学における言説空間は、いかなる種類の言説によって構成されているのだろうか。本稿では、廣松 渉 (1979, 1982: 第 2 篇第 2 章第 2 節) の言語論・判断論に登場する概念を借用しながら、科学における言説空間を構成する言説を 2 つの軸にそって整理する。その上で、科学全般の言説空間の中で人間科学が受けもつべき守備範囲を見定めたい。

a. 言説の 4 機能

廣松 (1979) は、言語の 4 機能として、指示、述定、表出、喚起をあげている。まず、言語の使用には、最低限、現前する世界の、ある断面を指示し、その断面を述定するという指示・述定機能が含まれている。たとえば、目の前を疾走する短距離走のランナーを見て、「速い！」という一語文を発する場合、現前する光景の総体が指示されているわけではない。ここで指示されているのは、疾走するランナーのスピードという一断面である。選手の体格や選手の足元のグラウンドは、現前する世界には含まれていようとも、当面の指示対象からは除外されている。現前する世界の中から、選手のスピードだけが指示され、そのスピードが「速い！」と述定されているのだ。この「指示-述定」の対が、言語の 4 機能の中でも核をなす。

上の短距離ランナーの例では、すでに「指示-述定」態が発話者に帰属されていた。つまり、「指示-述定」態が、すでに発話者に帰属するものとして表出されていた。しかし、理論的には、まずは、帰属以前の「指示-述定」態を措定し、しかるのちに、その「指示-述定」態の表出、さらには喚起を考察すべきである。実際、「あのランナーは速い」とい

う「指示－述定」態が、隣で観戦する友人には帰属していない（つまり、その友人は、そのランナーを速いとは思わない）という事態は十分可能である。

人物への帰属（人称的帰属）を問題とする以前の、純粋な「指示－述定」態は中性的である。その中性的な「指示－述定」態を基本に、表出と喚起の2機能を説明しよう。廣松は、中性的な「指示－述定」態の述定、つまり、中性的な「指示－述定」態を指示し、述定する機能として、表出を定義する。ここには、中性的な「指示－述定」態そのものを一つの指示対象とし、それを述定するという、「指示－述定」の入れ子構造がある。

中性的な「指示－述定」態が、「発話者に帰属する」と聴き手によって述定されるとき、すなわち、「指示－述定」態が発話者に帰属するものとして聴き手に現前するとき、表出の機能が成立する³。このように、表出機能においては、単なる語と語の関係（中性的な指示－述定の関係）を超えて、言語的コミュニケーションの場が問題となる。そこでは、発話者から聴き手への影響が含まれており、発話者と聴き手をめぐる状況が言語を介して変化する。

次に、喚起は、表出段階までで登場した二重の入れ子構造それ自体を指示して、3段目の述定をなす機能である。「発話者に帰属する」と聴き手によって述定された「指示－述定」態が、「何らかの行動を喚起する」ものとして聴き手によって述定されるとき、喚起の機能が成立する。言い換えれば、発話者に帰属するものとしての「指示－述定」態が、「何らかの行動を自らに喚起するもの」として聴き手に現前するとき、喚起がなされたことになる。喚起機能が、表出以上に言語的コミュニケーションの場に踏み込んでいることは言うまでもない。そこでは、発話者の影響は、聴き手の認識にとどまらず、聴き手の行動を喚起するレベルにまで及んでいる。聴き手の行動は、発話者、あるいは、それ以外の人物の新たな行動をも誘発し、彼らをめぐる状況を変容させる契機となる。

以上、言語の4機能について述べたが、中性的な「指示－述定」機能のみを含む言説は、人称的な帰属がまったく問題にならないがゆえに、没人称的言説と呼ぶことができる。没人称的言説は、英語式に記せば、*It is said* ……、*They say* ……における……の部分に相当する。一方、「指示－述定」に加えて表出、喚起までの機能を含む言説は、人称的な帰属が問題となるがゆえに、人称的言説とよぶことができる。

ここに、科学の言説空間の構成を明らかにする上での第1軸を得ることができた。それは、「言語の4機能のすべてを含む言説」を一方の極に、また、「4機能のうち指示・述定機能のみを含む言説」を他方の極に配する軸である。前者は典型的な「人称的言説」、後者は典型的な「没人称的言説」と言い換えてもよい。

この軸のどこに位置する言説を使用するかによって、自然科学と人間科学の違いを明確にすることができる。前節で述べたように、自然科学は、人間が知ろうが知るまいが存在する事実を解明しようとする。その方法論的鉄則は、一線の向こう側に据えた観察対象を、

³ 四肢構造論と呼ばれる廣松の代表的理論において、「として」関係は極めて重要な位置を占める。四肢構造論は、素朴实在論を排し、徹底的な関係主義の立場をとる。たとえば、素朴实在論に立てば、眼前に犬が見えるのは、外界に実在する犬が、視覚的に内界に捉えられたことである。それに対して、四肢構造論の立場に立てば、犬が見えるのは、「犬（という意味）」としての「対象」が、「犬という意味を識る人々の一員」としての「主体」に帰属するという4項関係態が成立していることである。

一線のこちら側から観察するというものであった。そこにおいて、人間が知る知らないとは無関係に存在する事実を観察するからには、一線のこちら側がだれであろうとも、観察結果は同じ言説で報告されねばならない。したがって、自然科学の言説は、典型的な没人称的言説で構成されることになる。

ただし、このことは、自然科学の言説が初めから没人称的であったことを意味しない。自然科学のいかなる言説も、その言説が初めて登場したときには人称的言説であったはずである（たとえば、後に実証されることになる仮説を初めて主張した人物には帰属されるが、大多数の人々には帰属されていないなど）。それが実験結果の追試や、現実の現象に対する説明力などから、次第に多くの人に帰属されるようになり、次第に、帰属される人物が特定人物の域を超えて「人々」という理念的な存在になった結果として没人称的な言説になる。自然科学の営為は、言説の徹底的な没人称化を目指す運動である。

では、人間科学の言説空間はいかなる構成になっているのか。人間科学は、研究者と当事者の協同的実践から知識を紡ぎ出す科学である。その協同的実践にとって、言語的コミュニケーションは必須であり、したがって、そこでの言説は表出・喚起機能を伴うものでなければならない。つまり、人間科学の言説は、典型的な人称的言説を含む必要がある。

しかし、人間科学の言説は典型的な人称的言説のみで構成されるわけではない。いかに歴史的・文化的拘束下にある「事実」であっても、協同的実践に携わる研究者と当事者にとって、人称的帰属を問わない「事実」は必要である。その「事実」に関する言説は、研究者と当事者が協同的実践を進める上での判断を左右する。この種の「事実」に関する言説を、自然科学の典型的な没人称的言説と区別するために準没人称的言説と呼ぶならば、人間科学の言説空間は、典型的な人称的言説と準没人称的言説から構成されると言える。

b. 知覚現場的言説と概念思考的言説

以上、廣松の言語の4機能論を借用して、「人称的（指示・述定・表出・喚起）……没人称的（指示・述定）」という軸を提起し、それに基づいて自然科学と人間科学の言説空間の違いを論じてきた。次に、同じく廣松の判断論を参考にして、言語空間を整理するもう一つの軸を追加してみたい。

廣松は、その判断論において、判断を、「SはPなり」という「主語－述語」態を対境として行われる態度決定、すなわち、「主語－述語」態を自らに帰属させるか否かの態度決定であると述べた上で、知覚現場的判断と概念思考的判断の区別を導入している。知覚現場的判断とは、詞Sの意味（被表的意味）の個別事例（たとえば、昨日見た犬）をP（怖かった）として述定する「主語－述語」態を対境とする判断である。一方、概念思考的判断とは、物象化した詞Sの意味（すなわち、概念、たとえば、犬なるもの）をP（どう猛である）として述定する「主語－述語」態を対境とする判断である。

本稿では、廣松の知覚現場的判断と概念思考的判断の概念を借用し、科学の言説空間を構成するもう一つの軸として、「知覚現場的言説－概念思考的言説」という軸を導入したい。かりに、同じ人間科学の人称的言説であっても、「子どもを殴るあの親は許せない」という知覚現場的言説と、「児童虐待には絶対反対だ」という概念思考的言説では違いがある。

同様のことは、自然科学の没人称的言説にも当てはまる。自然科学における知覚現場的言説の代表は、観察・測定された数値データである。たとえば、ある鉱物の炭素含有量と

硬度との関係を調べたとしよう。その場合、炭素含有量の少ないものから多いものまで多くの標本を集め、それぞれの硬度を測定し、2次元グラフに測定値をプロットしたとしよう。このプロット図は、いかに測定装置を媒介しているとはいえ、研究者が観察（知覚）した事象を言説化したものである。しかし、多数ではあるにせよ、その有限個のデータから炭素含有量と硬度の関係を、ある関数を用いて表現したとき、その関数はもはや知覚現場的言説の域を超えて、概念思考的言説に属する。なんとなれば、その関数は、炭素含有量と硬度の無限個の組み合わせについて言及しているからであり、すでにして概念的である。

では、知覚現場的言説と概念思考的言説の違いはどこにあるのだろうか。知覚現場的言説の特徴は、何といても、その具体性にあり、知覚現場を実践の対象とする場合の具体的指針を与える点にある。上に人間科学の知覚現場的言説の例として挙げた「子どもを殴るあの親は許せない」であれば、「あの親」を実践の対象（たとえば、殴るのを制するときの実践の対象）として明示している。また、自然科学の知覚現場的言説の例として挙げた炭素含有量と硬度のプロット図であれば、それは観察・測定の正確さを検討するという実践の対象を明示している。仮に、ある炭素含有量に対する硬度の値だけが突飛な値を示していれば、データを記録したときのミスかもしれないと、それは再観測（再実践）の対象となる。

一方、概念思考的言説は、知覚現場的言説のような具体性はないが、その代わりに、知覚現場的言説よりもはるかに強い伝播力を有している。上に人間科学の概念思考的言説の例として挙げた「児童虐待には絶対反対だ」という言説は、「あの親」を知らない人々にも十分伝達可能である。人間科学の協同的实践は、限定された時期と場所で、限定された人々によって行われるローカル（局所的）な実践である。しかし、いかにローカルであろうとも、その中での言説の伝播力は、協同的实践の進捗を左右する。また、あるローカルな場で行われた協同的实践は、そこでの知覚現場的言説を概念思考的言説に抽象化することによって、他のローカルな場へと伝播する力を獲得する。

また、上に自然科学の概念思考的言説の例として挙げた炭素含有量と硬度の関数は、具体的な観測値よりもはるかに伝達が容易である。現に、自然科学の教科書には、さまざまな関数は掲載されても、具体的な観測値が掲載されることは稀である。

c. 人間科学の守備範囲

われわれは、以上、科学の言説空間の構成を整理するために、2つの軸 --- 「人称的（指示・述定・表出・喚起） --- 没人称的（指示・述定）」の軸と「知覚現場的言説 --- 概念思考的言説」の軸 ---- を導入した。図1（上段）は、これら2つの軸を組み合わせで表現した科学の言説空間である。いずれの軸も本来は連続的に推移する性質のものであるが、以下、論旨を明瞭にするために、次の6つの代表的ポジションを用いて論を進めよう。

- ① 人称的かつ知覚現場的
- ② 人称的かつ概念思考的
- ③ 準没人称的かつ知覚現場的
- ④ 準没人称的かつ概念思考的
- ⑤ 没人称的かつ知覚現場的

⑥ 没人称的かつ概念思考的

このように科学全般の言説空間を表現した場合、自然科学の特徴は、知覚現場的言説と概念思考的言説の双方において、究極の没人称化を目指すところにある。すなわち、上の分類によれば、図 1（中段）に示したとおり、徹底して⑤と⑥の言説を目指すところにある。没人称的言説は、言説の帰属が一切問題とならない中性的な言説であるがゆえに、時と場所を越えて万人に妥当する普遍的な言説である。しかし、同時に、没人称的言説だけでは、現象を変える力はまったくない。「水素原子 2 個と酸素原子 1 個を反応させれば水の分子 1 個ができる」という言説をいくら繰り返しても、水はできない。自然科学の言説が現象を変える力となるには、工学について後述するように、人称的言説と同時に使用される必要がある。

一方、人間科学の言説は、典型的な人称的言説と準没人称的言説の双方からなり、その各々が知覚現場的言説と概念思考的言説とからなる。すなわち、図 1（下段）に示したとおり、①-④の言説から構成される。そのうち①と②は人称的帰属が重要となるがゆえに、万人に妥当する言説にはなりえない。また、③と④にしても、歴史的・文化的拘束を受けているがゆえに、純粋な意味で万人に妥当する没人称的言説にはなりえない。しかし、人称的言説は、表出、喚起の機能を有するがゆえに、現象を変容する力を持っている。

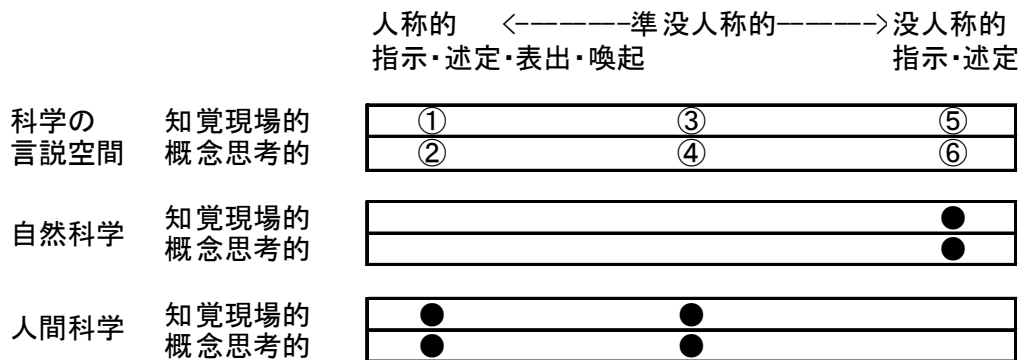


図1. 科学における言説空間の構成

先に、自然科学の言説だけでは現象を変える力はまったくないと述べたが、自然科学の言説が①-④の言説領域と同時に使用されるとき、現象を変容する力を獲得する。実際、工学と呼ばれる分野の言説空間は、⑤、⑥に①-④を加えた構成になっている。ただし、その工学においてすら、学術論文という形式をとるときには、もっぱら⑤、⑥（あるいは、せいぜい③、④まで）しか含まれず、①、②の言説は、研究の裏話や工学的プロジェクトの体験談の中にしか登場しない。ここに、真っ向から①-④を守備範囲とする人間科学と、工学との協同研究が求められる理由がある。

では、人間科学が、その守備範囲である①-④の言説を駆使して、当事者との協同的実践を実りあるものにするためには、いかなる点に留意すべきであろうか。当事者の言説は、①が大半を占めることが多い。そこに、②、③、④の言説類型をプラスし、言説空間を豊

かにすることが重要である。しかし、決して①の言説を②－④の言説に「翻訳」せよ、などと言っているのではない。協同的实践の現場において、①の言説が大半を占めるところからスタートし、それに②、③、④のそれぞれをなるべく多く追加する（この過程では、①の言説もさらに追加する）。こうして、①－④のそれぞれにおける言説を豊かにするのである。

こうして蓄積される言説は、ただ単にプールされていくわけではない。蓄積される言説は、互いに言及し合いつつ、言説空間は再構成される。その再構成は、①－④の一つ一つの内部でも行われるし、①－④の言説類型を越えても行われる。

協同的实践は一次モードと二次モードという2つのモードの連続的交替運動である（杉万 2000, 2006, Sugiman 2006）。一次モードとは、いわば素朴实在論的に現象の過去、現在、未来を把握し、協同的实践を推進するモードである。ここで重要なことは、一次モードの協同的实践は、必ず「気づかざる前提」に立っているということだ。「気づかざる前提」に立たない協同的实践などありえない。その「気づかざる前提」に気づく瞬間が二次モードである。それまでの事実認識、あるいは、価値判断の根底にあった「気づかざる前提」について、「そう思い込んでいた」と過去形で気づく瞬間である。こうして、二次モードを経て、協同的实践は新たなる一次モードへと歩を進めることになる。

この一次モードと二次モードの交替運動は、協同的实践の言説空間でも生じる。いや、むしろ、言説空間における交替運動こそ、協同的实践の交替運動の中核をなすとさえ言える。協同的实践を支える言説空間の言説一つ一つ、どれをとっても、必ず「気づかざる前提」に立っている。したがって、言説空間のいずれの言説も二次モードによって新たな言説へと改訂される可能性を有している。ある言説が改訂されれば、それは他の言説を改訂する契機になるし、引いては、言説空間全体の再編成へと波及していく。

このように、人間科学の言説空間では、①を中心とする言説空間から始まり、②－④の言説の追加を経て、言説空間全体の再編成がなされていく。しかし、忘れてならないのは、現場の変容力に最も富んでいるのは①の言説であるということだ。4種類の言説からなる言説空間が再編成されながら、その結果として、①の言説がいかに鍛えあげられていくか、これが協同的实践の帰趨を決する。あえて標語風に述べるならば、「①より出でて①に帰る」ということになろうか。

①の言説は、人称的かつ知覚現場的な言説である。これを、日常用語で表現すれば、具体的な現象に対する自らの「意思」の「表出」であり、他者の中に行動を「喚起」する言説である。それは、一般に主観的と言われる言説に他ならない。以上が、本稿の題目である「人間科学における主観的言説の重要性」を標榜する根拠である。

d. 最後に

本稿を閉じるにあたって、明示的な言説によって言説空間を豊かにする営みと定義した科学について、少々自省しておきたい。それは、ともすると、科学という名のもとにおいてなされる営みのすべてが、純粋な知的探求心の発露としてまかり通るがごとき思い込みがあるからだ。その思い込みは、一般の人々にもあるが、とりわけ研究者に顕著であるように思われる。この点は、研究者ならぬ一般の人々との協同的实践を旨とする人間科学では、とりわけ重要である。

言うまでもなく、われわれの生が、すなわち言説ではない。いかに「言語ゲーム」の概念を広く捉えようとも、所詮、言語ゲームは生の一部にすぎない。とくに、言説を明示的な言説に限った場合には、このことが一層当てはまる。そうであれば、当事者と研究者の協同的实践も、まずは当事者の生に即して考えられるべきだろう。いかに、当事者が、その生の中に問題を抱え、苦悩していたとしても、それが言説空間を豊かにすることによって解決されるのかどうか、それは個別的な事情に依存する。少なくとも、当事者のすべての問題に対して、言説空間を豊かにするという方策、すなわち、研究者と当事者の協同的实践が有効であるなどとは決して言えない。

確かに、豊かな言説空間を紡ぐ協同的实践が、当事者の問題解決に有効な場合も多いのは事実であろう。しかし、同時に、当事者にとって、研究者との協同的实践などどうでもいい場合もある。また、研究者との協同的实践など百害あって一利なしという場合もあるであろう。たとえば、筆者自身、1995年1月17日に神戸地域を襲い、6,000人以上の死者を出した阪神大震災の直後に、そう痛感した。それ以前から自然災害を研究テーマの一つにしていた筆者は、地震の3日後には現地に入ったが、家族や友人、わが家を失い避難所に身を寄せる大量の人々を見たとき、もはや言葉を失った。また、被災者も、必要最低限の言葉を別にすれば、じっと自らの喪失感を無言でかみしめているように見えた。今から思えば、被災者にとって、少なくともその時点においては、言説空間を豊かにする営みなど、まったく無用の長物どころか、迷惑千万な営みではなかっただろうか。

引用文献

- 廣松 渉 (1979). 意味の存立と認識成態：もの・こと・ことば 勁草書房（廣松渉著作集 第1巻(1996) 岩波書店 所収）
- 廣松 渉 (1982). 存在と意味（第一巻）岩波書店
- Sugiman, T. (2006). Theory in the Context of Collaborative Inquiry. *Theory & Psychology*, 16(3), 311-325.
- 杉万俊夫 (2000). よみがえるコミュニティ ミネルヴァ書房
- 杉万俊夫 (2006). コミュニティのグループ・ダイナミックス 京都大学学術出版会
- 柳父 章 (1982). 翻訳語成立事情 岩波書店

— 2009. 1. 15 受稿, 2009. 4. 30 受理 —

The importance of ‘subjective’ discourses in human sciences

Toshio Sugiman (Kyoto University)

Researchers and scholars in a variety of fields produce knowledge in the human sciences through collaborative practice with their subjects while researchers in the natural sciences produce knowledge through observation of objects that are separate from them. Having defined the role of sciences, natural or human, as enrichment of discursive worlds, we examined the difference between the two clusters of scientific efforts from the viewpoint of discourse informed by a theory of language and judgment by the Japanese philosopher, Wataru Hiromatsu (1993-1994). In his theory, language has four functions: indication, description, expression, and activation. Linguistic judgment is classified into *perceptual* judgment in which concrete phenomena are indicated and *conceptual* judgment in which abstract concepts are indicated.

In this paper, the discursive world was conceptualized in terms of two parameters, one was ‘depersonalized/quasi-depersonalized/personal’ and the other was ‘perceptual/conceptual.’ Personal discourse includes all four functions listed above while depersonalized discourse uses two: indication and description. Quasi-depersonalized discourse has the same two functions as depersonalized discourse, but the two functions reflect cultural and historically tacit assumptions.

We argue that a discursive world consists of depersonalized perceptual/conceptual discourses, thus objective discourses, in natural sciences whereas the discursive world of the human sciences consists of quasi-depersonalized or personal perceptual/conceptual, thus subjective discourses, in human sciences. This schism demonstrates that there is a division of labor between the two clusters of science in their joint activities and that the subjective discourse is essential and plays a critically important role in human sciences.

Key words: subjective discourse, human sciences, natural sciences,
personal/depersonalized discourse, perceptual/conceptual discourse

Author:

Sugiman, T.

Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Kyoto,
Japan. Mail: sugiman@toshio.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

